

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 28 日現在

機関番号：32203

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21390158

研究課題名（和文）がん患者のサバイバーシップ：地域・職域・学校における支援強化に向けて

研究課題名（英文）Cancer survivorship: creating a better support system in local communities, workplaces, and schools.

研究代表者

高橋 都 (TAKAHASHI MIYAKO)

獨協医科大学・医学部・准教授

研究者番号：20322042

研究成果の概要（和文）：わが国のがん経験者（サバイバー）が社会の中で自分らしい暮らしを実現する障壁となる社会的問題を把握するため、地域・職域・学校に関連する社会調査を実施した。具体的には、一般市民のがんイメージ調査、栃木県内の養護/一般教諭調査、親のがんに関する文献検討と海外の資料収集、小児がん患者の母親の就労調査などを実施し、我が国の医療システムや文化に基づいた支援のあり方を考察した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to reveal social problems that cancer survivors confront in local communities, workplaces, and schools. We conducted surveys regarding 1) the general public's perception of cancer prognosis and incidence, 2) school teachers' perception of support for children whose parents have cancer, and 3) work-related issues experienced by mothers of children with pediatric cancers. Based on the results, we discussed measures that could achieve an effective and sustainable support system for cancer survivors in Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	5,900,000	1,770,000	7,670,000
2010年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2011年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
総計	14,800,000	4,440,000	19,240,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：医療社会学

キーワード：医療・福祉、癌、社会医学

1. 研究開始当初の背景

がんは日本人にとって極めて身近な疾病であり、治療成績の改善および社会の高齢化によるがん罹患者数の増加にともない、がん

治療後も長年に生存して活発な社会生活を送る人々の数も急増している。地域がん登録に基づく5年相対生存率は全がん平均で54%に達し、2015年末の短期がん生存者（診

断後5年未満)と長期がん生存者(診断後5年~25年)の合計は533万人にのぼると予測されている。これらのデータは、がんを「死に直結する病気」ではなく慢性病としてとらえ直す必要性と、がん罹患後も長期生存する人々の生活の質向上の支援が喫緊の課題であることを示している。

2. 研究の目的

わが国のサバイバーが社会の中で自分らしい暮らしを実現するために、彼らや家族が直面する社会的問題を詳細に把握し、日本の文化的背景や医療システムに基づいた実効性かつ持続性のある対策を提言することである。本研究では特に、地域・職域・学校における問題に着目した。

3. 研究の方法

本研究では、それぞれの社会調査において、質問紙調査、インターネット調査、個別インタビューの手法を用いた。本研究内で実施するすべての調査は、ヘルシンキ宣言第5次改定および厚生労働省が定める臨床研究に関する倫理指針および疫学研究に関する倫理指針に従い、十分な倫理的配慮をした。

4. 研究成果

(1) 学校現場における、がんの親を持つ子どもへの支援研究

①養護教諭調査

栃木県内の小・中・高校に勤務する全養護教諭720名を対象に無記名自記式質問紙調査を実施。有効回答数256(有効回答率35.6%)。平均年齢44.2歳。回答者の24.2%は、がんを持つ親の子どもに関する相談を受けた経験を有した。実際に行った関わりは1)「担任・学年主任との連携」49名、2)「生徒と面談」40名、3)「他職種(スクールカウンセラーや心の教室相談員)との連携」8名、「がんの親との面談」8名、「グループケア」8名。相談経験の有無に関わらず、養護教諭が参考にしたい情報・事柄として、1)子どもの年齢に応じたがんという病気の説明の仕方(79.2%)、2)子どもに表れる反応(心理面、身体面、行動面)(73.5%)、3)子どもを支援する際の留意点・介入後の対応について(71.9%)が選択され、実際の子どもの対応に関する情報が求めら

れていることが明らかになった。

②一般教諭調査

那須塩原市内の公立小中学校35校に勤務する一般教諭1014名を対象として無記名自記式質問紙調査を実施。有効回答数608(有効回答率60.0%)。平均年齢39.8歳。がんを持つ親の子どもに関する相談を受けた経験を有したのは回答者の11.2%であり、相談にのった相手は生徒の母、生徒自身、生徒の父、他の教諭の順であった。がんの親を持つ児童生徒を支援していく際に、参考にしたい事柄や知っておきたい情報としては「年齢に応じた病気説明の仕方」「子どもの反応」などが挙げられた。

③教員向けガイドブックの開発

平成21-22年度で実施した養護教諭と一般教諭調査の結果、および海外の教材のコンテンツを参考にして、「親ががん治療を受ける子どもへの支援」に関する学校関係者向けの小冊子を作成し栃木県内の学校関係者に配布した。小冊子では、調査結果を紹介するとともに、子どもや親に向けた支援へのアドバイスや参考資料を記載した。

今後、ガイドブックを用いた教員向けセミナーなどの企画・実施・評価を予定しており、学校における支援の展開が期待される。

(2) 日本人のがん5年生存率イメージ調査の分析

国内に居住する一般市民3021名(成人調査モニター約69万人の中から、年齢・性別・居住地を国勢調査データに準拠した構成割合で無作為抽出)を対象としたインターネット調査を実施し、一般市民が抱くがん種別5年生存率イメージおよび生涯がん罹患率のイメージを質問した。有効回答数2369(有効回答率79.9%)。回答者の平均年齢は50.5歳。回答者は「すべてのがん」の5年生存率を約5割と回答。地域がん登録に基づく疫学データでは予後が良好な甲状腺がん(5生率92%)、精巣がん(同92%)、乳がん(同86%)などのがん種についても、その5年生存率を4-6割と回答しており、医学的事実と一般市民のがんイメージの乖離が明らかになった。いくつかのがんでは、女性、年齢が高い者、家族や友人にがん治療を持つ人がいる者は、有意に5年生存率を高く認識していた。

日本人男女の生涯がん罹患率に関しては、

回答者の正解率は日本人男性について 8.5%、日本女性について 33.1%にとどまっていた。年齢の若い者、学歴の高い者、家族や友人にがん治療を持つ人がいる者は、有意に生涯がん罹患率を高く認識していた。

我が国の一般市民のがんイメージは、疫学的事実と大きくかい離していることが明らかになった。誤ったイメージを是正するための方策が必要である。

(3) 小児がん患者の母親の就労状況調査

小児がん患者の母親の就労状況について、小児センター病院血液腫瘍外来にて手渡しにより質問票を24部配布し、13部を郵送回収した(回収率54.2%)。母親の年齢は30歳台(61.5%)が最も多く、患者の診断時の平均年齢は5.3±3.19歳、現在の平均年齢は8.3±3.3歳であった。疾患名は、白血病8名(61.5%)が最も多かった。

治療中に正規社員として就労を継続した母親は1名のみで、その他の母親12名は就労していなかった。就労を継続した理由は、「生計維持のため」であり、就労していなかった理由は、「子どもへの面会・介護に専念したい」という理由が最も多かった(75.0%)。治療終了後は4名が就労し、9名が就労していなかった。就労していない9名のうち、6名に就労の希望があった。就労の希望があっても、就労していない主な理由は、「小児がん患者の再発の不安」、「小児がん患者の看護や介護」、「就労に対する家族の理解が得られない」であった。調査は現在も継続中であり、今回は少数事例の分析に留まるが、諸外国の既存研究と比較して就労継続・復職率は低いことが示唆された。治療後も継続する母親本人のストレスや、兄弟姉妹へのサポートなどをふくめた包括的な支援が必要と考えられた。

(4) 自然災害時におけるがんサバイバー支援に関する研究

東日本大震災後に被災地のがんサバイバーが直面した困難や医療者の対応について、岩手県の看護師2名のヒアリングを行うとともに、被災地支援を行った学会関係者や支援グループによる学会・文献発表の内容を時系列に分析した。

発災後の医療状況は1週間以内の「生存を目指す期間」、2か月以内の「防ぐことがで

きる死亡を防ぐ期間」、3か月以降の「復興期」に大別され、各段階でがん医療とそれ以外も含む医療全般とは不可分に関連していた。特にがん医療に特化すると、被災による治療の途絶、患者と家族の心身の疲弊、在宅医療システムの崩壊が課題であった。被災地以外の地域でも、被災地に存在する製薬工場の不稼働による薬剤不足(甲状腺末など)や計画停電による病院機能の低下が認められた。

発災早期から全国のがん診療連携病院が患者受け入れを表明したが、今回の震災では治療を目的として地元を離れる患者・家族は少数であり、被災地内での支援の構築が今後の課題であることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 15 件)

1. Wada K, Ohtsu M, Aizawa Y, Tanaka H, Tagaya N, Takahashi M.: Awareness and behavior of oncologists and support measures in medical institutions related to ongoing employment of cancer patients in Japan, *Jpn J Clin Oncol*, 査読有, 42:295-301, 2012
DOI: 10.1093/jjco/hyr202
2. Ishida Y, Takahashi M, Maru M, et al: Physician Preferences and Knowledge Regarding the Care of Childhood Cancer Survivors in Japan, *Jpn J Clin Oncol*, 査読有, in press, 2012
DOI: 10.1093/jjco/hys038
3. Takahashi M, Inokuchi T, Watanabe C, Sauto T, Kai I: The Female Sexual Function Index (FSFI): Development of a Japanese Version, *Journal of Sexual Medicine*, 査読有, 11: 2246-2254, 2011
DOI:10.1111/j.1743-6109.2011.02267.x
4. Ledesma D. Takahashi M, Kai I: Interest in a group psychotherapy program among Philippine breast cancer patients and its correlative factors, *Psycho-Oncology*, 査読有, 29: 1007-1012, 2011
DOI: 10.1002/pon.1804
5. Taira N, Sawak Mi, Takahashi M, Shimozuma K, Ohashi Y: Comprehensive geriatric assessment in elderly breast cancer patients. *Breast Cancer*, 査読有 17(3): 183-189, 2009

- DOI: 10.1007/s12282-009-0167-z
6. Yamazaki H, Slingsby BT, Takahashi M, et al. Characteristics of qualitative studies in influential journal of general medicine: a critical review. *BioScience Trends*, 査読有 3(6): 202-209, 2009.
URL: <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/20103848>
 7. 高橋 都: 面白い質的研究を生みだそう! データの質の確保について, *医学教育*43: 37-39, 2012
 8. 高橋 都: わが国で活用できる女性性機能尺度の紹介—Sexual Function Questionnaire日本語 34 項目版と Female Sexual Function Index日本語版—, *日本性科学会雑誌*, 査読有, 29: 28-31, 2011
 9. 小林真理子: 子どもたちのこころのサポート—サポートグループの実践から, *Family Care*, 査読無, 9:28-31, 2011
 10. 丸 光恵: 成人科ナースに知ってほしい小児慢性疾患患者の移行支援—成人移行支援とは, *ナーシングトゥデイ*, 査読無, 26:14-19, 2011
 11. 高橋 都, 加藤知行, 前川厚子, 小池眞規子, 甲斐一郎: Enterostomal Therapist / Wound, Ostomy, Continenceナースによる性相談の実態調査: 相談内容とアドバイスに着目して, *日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌*, 査読有, 14:230-238, 2010
 12. 高橋 都: がん治療後の「幸せな性」, *現代のエスプリ*, 査読無, 517:54-64, 2010
 13. 高橋 都: 乳癌治療後のセクシュアリティ: 医師・看護師に期待される支援, *Cancer Board乳癌*, 査読無, 3:87-90, 2010
 14. 高橋 都: がんサバイバーの性機能障害と性腺機能障害への支援, *腫瘍内科*, 査読無, 5:139-144, 2010
 15. 武田裕子, 大滝純司, 高橋 都, 森尾邦正, 高田美里, 稲福徹也, 安井浩樹, 高屋敷明由美, 甲斐一郎: 医師偏在の背景因子に関する調査研究第1報—医学生、初期研修医の進路選択の現状と診療科・診療地域選択の影響要因. *日本医事新報* 査読有 4471号 (2010年1月2日発行) 101-107, 2010
- [学会発表] (計 19 件)
1. 神前裕子 他: 小学校における“がんの親をもつ児童”への支援についての検討—教師・養護教諭対象のアンケート調査から, 第13回日本子ども健康科学会学術大会, 2011年12月17日, 東京
 2. Takahashi M: Impact of the earthquake in Japan on cancer survivors and the healthcare system, *The 13th World Congress of Psycho-Oncology*, 2011年10月17日, Antalya (Turkey)
 3. 高橋 都: 小児がん経験者の長期フォローアップの課題～成人診療科とくまぐやっっていく>ためのヒント, 第11回小児がん中部トータルケア研究会, 2011年10月1日, 名古屋
 4. 高橋 都 他: 乳がん患者の夫の体調変化と相談行動—乳がんカップル調査<第1報>, 第24回日本サイコオンコロジー学会, 2011年9月29日, さいたま市
 5. 小林真理子 他: がんの親をもつ子どもへの学校での支援に関する調査<第二報>—一般教員へのアンケート調査分析, 第24回日本サイコオンコロジー学会, 2011年9月29日, さいたま市
 6. 小林真理子 他: がんの親をもつ子どもへの学校での支援に関する調査<第三報>—養護教諭と一般教諭の比較分析, 第24回日本サイコオンコロジー学会, 2011年9月29日, さいたま市
 7. Ishida Y. et al: Physician Preferences and Knowledge Regarding the Care of Childhood Cancer Survivors in Japan, *European Symposium on Late Complications after Childhood Cancer 2011*, 2011年9月29日, Amsterdam (Nederland)
 8. 小林真理子 他: 親ががんになったとき～子育て中のがん患者さんとお子さんへのサポート, 第5回日本緩和医療薬学会年会・市民公開講座, 2011年9月24日, 千葉
 9. Takahashi M: Sexuality & intimacy after breast cancer in Japanese cultural and clinical context, *The 20th World Congress for Sexual Health*, 2011年6月14日, Glasgow (UK)
 10. 高橋 都: がん治療を受ける本人と家族が抱える就労問題—産業保健スタッフに期待すること, 第84回日本産業衛生学会特別研修会, 2011年5月21日, 東京
 11. Miyashita M, et al: Unmet information needs and quality of life in young breast cancer survivors in Japan, *Oncology Nursing Forum*, 2011年4月25日, Boston (USA)
 12. 高橋 都: 「医療にとって『死』とは何か」—治療可能性がない患者と向き合う医師—「見捨てないということ」の一考察, *日本生命倫理学会第22回年次大会*, 2010年11月21日, 豊明

13. 大久保豪 他：がんサバイバーの就労支援教材の分析：海外（英語圏）の患者支援団体の資料から，第69回日本公衆衛生学会総会，2010年10月29日，東京
14. 小林真理子 他：がんの親を持つ子どもへの学校での支援に関する調査，平成22年栃木県養護教育研究会秋期研修会，2010年10月21日，宇都宮
15. 高橋 都：親が癌になったとき—子どもへの伝え方、支え方，第23回日本サイコオンコロジー学会・第10回日本認知療法学会合同大会，2010年9月24日，名古屋
16. 小林真理子 他：がんを持つ親の子どもに対する学校での支援に関する調査〈第一報〉，第23回日本サイコオンコロジー学会・第10回日本認知療法学会合同大会，2010年9月24日，名古屋
17. 高橋 都：ストーマを持つがん患者のセクシュアリティ，第42回東京ストーマリハビリテーション研究会，2010年9月18日，東京
18. Yuko Takeda et al: Factors associated with Japanese Physicians' Choice of Practice Sites, 第42回日本医学教育学会，2010年7月31日，東京
19. Miyashita M, Takahashi M: Information needs in young female breast cancer survivors in Japan, The 35th Oncology Nursing Society Congress, Poster presentation, 2009年5月14日, San Diego

[図書] (計5件)

1. 丸 光恵：小児がん診療ハンドブック～実地診療に役立つ診断・治療の理念と実践，医薬ジャーナル社，2011 (共著)
2. Takahashi M: Asian Perspectives and Evidence on Health Promotion and Education, Springer, 2011 (共著)
3. 高橋 都：がんと一緒に働こう！，合同出版，2010(共著)
4. 高橋 都：ケア従事者のための死生学，ヌーヴェルヒロカワ，2010(共著)
5. 高橋 都：性機能障害．新臨床腫瘍学第二版，pp859-862，南江堂，2009

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 都 (TAKAHASHI MIYAKO)

獨協医科大学・医学部・准教授

研究者番号：20322042

(2) 研究分担者

甲斐 一郎 (KAI ICHIRO)

東京大学・大学院医学系研究科・教授

研究者番号：30126023

小林 真理子 (KOBAYASHI MARIKO)

放送大学・教養学部・准教授

研究者番号：70383106

丸 光恵 (MARU MITSUE)

東京医科歯科大学・大学院保健衛生学

研究科・教授

研究者番号：50241980

武田 裕子 (TAKEDA YUKO)

三重大学・大学院医学系研究科・教授

研究者番号：70302411